

^ 5
694
1



古學子臺至來衣抄

俳諧切字論

檀之本北元

明治三十七年十一月五日

坪内雄藏氏贈

總叙

神代の昔より乎尔表波の道尤天然の定りありと

此の文字乃ぬも定りて三言四言五言六言小もお

りよ心をよみなわくそ致乃始といふは伊那那美

命阿那尔夜志愛表登古表とのりあつて伊那那岐

命阿那尔夜志愛表登表とけり給ふとるる。その後

須佐之男命夜久毛多都伊豆毛夜幣賀岐都麻若微

尔夜幣賀岐都久流曾能夜幣賀岐表とよみ給ふと

三十一字の弘乃濫觴なり人此代とまう神武天皇

の御時のほまでも今のおと假名を名れ文字るく

只口又耳言はくまつとくしるぞく。日本紀十

利門
696
卷

東京
評内
蔵

よてよたのつゝのそざらありては今の人のうよおき
てス^{カッ}らそ得るしとろふへい。一はは^カ挙てそ得そ
てそお祖翁の世は^カ多ひし。貞享え祿の頃るい
ず^カ世の中治りて廢^スき^カるを興^カし^カ後^カを^カ嗣^カ
孫^カ御政事^カなるい^カて。す^カく^カ子^カひ^カる人出^カて^カて^カ
難^カ信^カは契^カ沖^カ法師^カありて。刀^カ葉^カ代^カ通^カ記^カを著^カし。君
よ^カる。世^カは和^カ字^カ正^カ監^カ抄^カを^カ出^カす。是^カ假^カ名^カき^カひ^カの書^カの
監^カ觴^カ也。侍^カて荷^カ田^カ東^カ平^カ。加^カ茂^カ三^カ淵^カ。不^カ二^カ谷^カ成^カ章^カ。本^カ居
宣^カ長^カ同^カ春^カ庭^カ。お^カは^カ數^カあ^カは^カ翁^カ達^カ。古^カ景^カ北^カ先^カ達^カ。古^カ字
と^カつ^カて。世^カの^カ私^カよ^カさ^カる。こ^カあ^カる。あ^カら^カい^カ。あ^カら^カき^カ考^カ
据^カ有^カ子^カ也。致^カの^カ屋^カ翁^カ古^カ事^カ記^カ。日^カ本^カ紀^カ。万^カ葉^カ集^カ。よ^カう^カ古^カ今^カ

集^カとの^カ平^カの^カふ^カ平^カ原^カを^カ考^カ合^カせ。河^カの^カ玉^カの^カ緒^カる^カい^カり
時^カ代^カの^カつ^カつ^カり^カる^カり^カて。今^カの^カ世^カの^カ多^カ難^カく^カ用^カち^カる^カを
も^カ知^カる^カ。芭^カ蕉^カ文^カ考^カの^カ中^カさ^カい^カる^カを^カの^カも^カ。頑^カま^カち^カり
ぬ^カ。人^カあ^カら^カん。そ^カ下^カは^カ怯^カき^カる^カぞ^カう^カ。た^カま^カく^カ用^カけ^カ
る^カ今^カの^カ世^カの^カ考^カを^カり^カて。て^カには^カの^カ正^カを^カい^カて。そ^カれ^カて
引^カの^カて^カよ^カら^カう^カ。依^カ傍^カよ^カら^カ依^カ傍^カの^カて^カよ^カは^カあ^カり^カる^カぞ^カ
声^カよ^カら^カい^カ言^カり^カら^カあ^カら^カん。愚^カら^カる^カる^カる^カも^カお^カら^カる^カる^カぞ^カ
本^カ性^カる^カい^カる^カ論^カよ^カあ^カら^カん。奇^カを^カへ^カ。奇^カの^カて^カには^カた
俗^カ言^カを^カ一^カつ^カも^カき^カら^カず^カら^カん。依^カ傍^カよ^カら^カ用^カえ^カ修^カえ^カとも
よ^カら^カて。自^カ在^カる^カる^カお^カら^カん。さ^カら^カい^カだ^カ祖^カ翁^カの^カ著^カさ^カれ
し^カと^カつ^カふ^カ独^カ一^カあ^カら^カん。切^カ字^カ十^カ八^カ字^カの^カう^カら^カい^カら^カん。

ふとるくく例しる。又よし不叶支考私よりと定振弄よ
 きてすゆくとせえがはるハ平文といふ一おしりといふる
 る年よるれたようくあちきるき人そのをえららんてんといひ
 中のはしより誰が才の上をや馬つしるくらんと。さるるあそい
 ひしが去来た。いさるる人の数よ入で。くくいふ赤斗
 強り居たらん。知と切つくくのの沖の和の友を失ひて。老の浪
 のよまるくくるきん地そせらるる。中中ああれれととそそひ
 けめらるくくのの必一さまああま。老の浪のよるくく
 ちそよまるといふ格と又ん地をせら外とせのころくぬ格を
 るをせらるるてくるわぐららくくて。是をえてよは。日
 の浪の前よいふ物俗のたがひえ論はねよたの。詞

の法の浪えより字ずんをゆき安し。一向の浪と言ハ
 愛う福ふとの人みえるきさるる。やもしもれを
 名ある人のく一もしあるゆるい。平文よ奉てそ一
 二をえそてよはの上よ於て又芭蕉支考とても浪え
 浪たの。抑俗語をふ例とさるるち。あつたけ
 いやき詞をきふと。拾一葉よあれ。芭蕉翁の流
 へ雅言の方を多くきいて。俗言のくくさきく解
 きたるを心けいぐ免。俗言を一向ヒきらひ。句のまを
 た整ふせんとして。まぶや。依落や。何やうふらぬ
 やうなるる。又依落の邪及とつて。此タ諭
 ている。仏の及々八宗九宗とやうなれで。浄土を

身より大なるおぼふもとけ^ハ蒙^ハ某のまきく時ぞ秋
大^ハおしき。ぞとつゝる大^ハえ^ハけてね^ハめれのま
りの旋る小とも。け^ハまきとあ^ハく。心と^ハつ^ハつふ
ろく^ハかくつゝ^ハおた^ハ小^ハて。何の子細うあ^ハく人
と云れ^ハさ^ハい^ハう^ハよ^ハぞ^ハや。け^ハま^ハえ^ハぞ^ハと^ハく^ハく^ハて^ハか^ハる
ま^ハき^ハと^ハ定^ハり^ハく^ハ格^ハま^ハて^ハあ^ハく^ハを^ハえ^ハけ^ハせて^ハの
掟る^ハと^ハい^ハふ^ハめ^ハと^ハく。一向^ハま^ハて^ハい^ハそ^ハは^ハの^ハる^ハえ^ハ。
らぬ^ハいら^ハま^ハなり。文の内世の中の俗師のこ
とま^ハ今^ハ世^ハ盲^ハ俗^ハ師^ハと^ハい^ハひ。そ^ハの^ハ俗^ハ師^ハと^ハい^ハく^ハく^ハ
示^ハも^ハあ^ハ。翁^ハの^ハ口^ハより^ハ人^ハを^ハさ^ハして^ハかく^ハの^ハめ^ハ今^ハの
世^ハの^ハ自^ハ借^ハとい^ハふ^ハ俗^ハ師^ハの^ハや^ハく^ハく^ハ。拙^ハく^ハの^ハたま^ハよ

おう^ハて^ハは^ハま^ハて^ハ格^ハ一^ハ字^ハを^ハ依^ハて^ハく^ハく^ハを^ハい^ハく^ハし
け^ハ書^ハ有^ハ也^ハそ^ハの^ハ因^ハを^ハ支^ハ考^ハう^ハ大^ハを^ハ抄^ハよ^ハ言^ハ小^ハ
如^ハく^ハ祖^ハ翁^ハの^ハ扱^ハ法^ハを^ハ右^ハの^ハ門^ハ人^ハ治^ハう^ハ去^ハ集^ハて^ハ翁^ハの
著^ハ述^ハと^ハい^ハ世^ハよ^ハは^ハく^ハく^ハあ^ハき^ハく^ハさ^ハる^ハ。且^ハの^ハ巻
の^ハうち^ハ。五^ハ尺^ハの^ハ菅^ハ蒲^ハね^ハの^ハ柱^ハを^ハ合^ハ袋^ハ人^ハの^ハ白^ハを^ハせ。
そ^ハ外^ハ式^ハ目^ハの^ハる^ハえ^ハい^ハる^ハぞ。け^ハ抄^ハて^ハよ^ハは^ハと^ハ言^ハ葉^ハの
そ^ハよ^ハよ^ハ小^ハを^ハなり
一^ハ自^ハ亦^ハ於^ハ葉^ハの^ハる^ハ
自^ハ亦^ハ葉^ハの^ハ字^ハを^ハ於^ハと^ハ亦^ハ亦^ハ平^ハよ^ハあ^ハく^ハえ
合^ハく^ハ亦^ハと^ハ誤^ハと思^ハひ^ハ亦^ハと^ハま^ハあ^ハく^ハの^ハ丸^ハ亦^ハの^ハ葉^ハ板
ふ^ハし^ハ於^ハの^ハ字^ハを^ハせ^ハく^ハく^ハ。あ^ハく^ハま^ハ字^ハ本^ハの^ハあ^ハく^ハを

ちひ小しわろ。そは寛政九年の板平白雄寂業
ふも詠の字をひちりし。そは古字本の傳りあり
と。け抄ま補つる拙堂老のいふ。おひる小し人
並し。も改めざす。ま。おひる。と。え。い。う。も。が。や。は
そ。ん。ご。や。お。字。の。人。の。今。よ。あ。や。ま。い。も。ま。の。く。あ
る。え。う。か。さ。き。も。ぞ。と。う。く。警。し。お。く

一切字ス。かる。し。る。や。ま。ま。ぬ。ま。秘。字。り。け。り
そ。つ。ま。よ。せ。れ。け。い。う。ま。ち。上。十。八。字。也。

截^{キレ}字くまほぬふむゆるるめええりて。初
十八字とそし。し。ら。れ。ん。は。由。や。う。よ。せ。き。入
け。い。う。は。お。え。切。字。あ。り。て。河。と。て。よ。は。る。う。お。を。總^スて

の。所。ち。り。切。字。と。あ。へ。く。と。え。大。り。て。は。十。八。字
より。出。り。れ。む。お。字。の。筆。墨。を。も。と。り。て。や。う。よ
せ。秘。の。文。字。字。一。句。の。内。よ。入。だ。よ。す。め。を。切。る。
と。い。え。や。と。う。く。い。ぬ。ふ。を。や。と。い。ふ。か。と。並。り。ぬ
あ。よ。り。と。並。れ。ぬ。や。の。字。ス。き。ひ。ふ。あ。ま。き。ゆ。る。よ
か。と。り。よ。り。せ。ら。と。お。と。し。ゆ。り。き。い。ふ。も。并。つ。け
か。と。し。ゆ。り。し。き。と。お。と。し。ゆ。り。え。切。や。疑。の。や。の。え
別。と。う。く。京。臣。自。ら。い。ふ。人。も。た。ま。も。き。い。得。る。も。ま
き。え。い。ら。も。さ。か。き。い。つ。へ。く。句。を。奉。て。お。ま。の
お。よ。り。を。入。と。思。ひ。て。ま。の。つ。り。の。神。の。ま。が。も。と。を
し。ら。れ。え。い。ら。も。せ。ん。と。い。ふ。う。く。け。得。ま。き。え。は

みづる人そよせどおそやと。將言へも續く
初る小ス。いとえ違ふ。けるそ古今おめいん
合せんとし

一けり 漢字の初る

けり下は金とさる。中七文字の末にの字を金で
けりといふへしけりけりしきけりの反かきさる
けりいりの反りさるけりといふ

とあふと皆拾へし。そと巻もけりといふて。
初おと四つあらそふ初るううううう
茶屋も花見も人よろうううううとらふうをい
てあつこれとそよと限ら。にの字の字は

言の初るゆそあふて。まはのとのよかそ
るそなり。又は仏尼のけりといふるあり同答
為相々 九月晦日金連亭のふくよ けりあそや
秋のあきうううううう。同十月廿日金屋
けりあそやあふの始とらううううう。そと
ににといふ言こそあれと。あふのちあふう
たつぬ おけり けり あふ の あふ けり あふ 始
暇に集めとらう。そよとらう。十七字の
内よけりとあふ。一字あふあふあふあふ
い。一字たつあふけりといふあふあふあふ
まのあふを教へる。いふあふあふあふけりけり

まきらて三つまゝの意のひらきまゝとておぼや
けりてある 定めて言 けらて 推察 きく現在とる
去乃二亦あり又ほよりあり

一が

が切字よるゝいさゝらゝゝゝ 一ががきゝが
いひしがとりて切るゝ

侍者のまゝ一つといふまゝといふ一。一がが
いひがた。上よ 過去 のまの字はゝれた。口のが
ゝた異るゝ。まがといふま。一しがな。一がの
上下を省きゝゝのめておふまゝゝの
又一ゝがゝゝと。文字清てよめを 字 のが

ろゝ。又まゝと清てまこそ の 法行ろゝ。流ばの
不のま 代 るゝまゝくけ格は外て もの をといふ
辞はあゝて。下よ 詞 をふくゝ切るゝ格と。又
上のまの字を去ようゝれで。俗言たの字よ
お用してたがといふゝあゝれ。然るを お 字
はま り のまゝ一 ら のま。まがといひ 言 て 載 改
ゝゝ心は 海 一 の ま を 拙 ら なる。又まがと漏
と。まゝと清て 後 とてまゝも 少 る有するゝと。今
の人れゝを 入 るゝ 多 くまがといひ 漏 る。まゝ
と清てよま の ざ ら ゝ ぬ ゝと。ロよま ま がと お ぞ
ま ま あり

一れ 下知もおのつゝのらよ。おもこそおれ自
氷またく自 おれ 志めりあふ下 おれ 志てかへれ

おれたてえいうも自。市らよといて他る
又氷まらん氷とけがどどとつる自
氷とけが氷とつがねとつて他る。けら
つよよして自他入移る集と散と寄と放と
よくせんとまきつゝ。下せつけも皆回

一こそそのてよはれといふをあまゝ例

志りこそ人もおれや花ちして子やられ
たあふえこそ人のあふえやらん
志りこそ人もおれやと志者の志

こそそほひ。花てつてとぎら。おれや
まをふくむえあひ。

右切字十八字也初人の人あやま切字用する
れ。上上のつゝえんうううう。うううう。け
切字ろくも治絶す

あまうたまうやそいふておまのぬな
らぬ。あやま切字を用する。かといふそ
や。切るう切るういふ。さう。さう。さ
切る。有と推度てきふ人もあひなる
へし。又上切のうう。さう。さう。さう。さ
よろうて切字ろくも治絶す。さう。さう。さ

あつと。つとまふひひの有やせせ園よ挙てんよ。註
此邊々々々梧一葉ふるき貞享式と司と合下を
付てんき。ささのま十は四らみり僻がすの政。今
もかく文章のてよは河のあきま常は和宗
よう笑るるてよまふ。さうとに田舎の人の言
るをきけ。依傍も依傍のてにはあると強情
さうよめら。和哥のゆるは依傍のてよはとて
ふとほる。是日本のてよはるると祖翁とわさ
れ。支考う古今抄よ百世の明監を待とつよと
そ幾ふとまふ。ささのま十は四らみり僻がすの政。今
もかく文章のてよは河のあきま常は和宗

幻住庵有也無也の図 古字本

芭蕉庵桃青著

元祿の形式とらり

序は曰むく花の平よおる神代八雲の和哥を始
中畧 虚をまの綴るを是と一実を虚よほくを
とよ。実をまといひ虚字虚と取すも依傍の及よあ
らひ。さ風ス虚実のる。拵んで虚実よ止る。是我
おの秘変也野口中は曲を合るころろれ。ん中よ曲
を捨るころろれ。口曲て他門よ。ん曲てさ風也
はよ。さうてや芭蕉翁自ら風を立るといふ
てはさうとらり。案はさうとらり。ん中よ曲

くくると。徳で十八字の切字のそ解を〜
童の心徑を讀まうちとけりめとく。かると
りふ義理もけりの説もとぐるまどと何の
るゆゑも〜のよ。おらつて口切字の〜
さうろえ〜のろろ〜。今の世よてん小を蓮
二坊ろぐ〜げと〜怯まるを世よまぬ〜
おとおろ〜。うまわらるけり〜のくり〜
き解を。お字の人よとよ〜ゆるよゆい
ふ〜

挨拶切

いさ〜ら〜き〜は〜情ふあまで

挨拶切を他よ字丁の〜つ〜て。挨拶を天と〜挨拶を
地としていさ〜ら〜天と。せよよまろぶる地〜
これの上下の句。主客の隔をひて一句の切とみ。そ
あ〜さ〜ら〜

け句の截りとは〜あ〜くむ〜く〜ら〜て
初字のそ〜の〜い〜ら〜せ見よ情ふ
までと動くぬ句よて〜。切字とつあて。
假十八字ろ〜で。く〜つふむるが截り字ろ
け又字ろ切〜つ〜き〜。ぎ〜い〜よ〜て
自由は活〜。あ〜え〜祿の臆度れを〜へを弃
て。正〜や古學子よ〜ふ〜き〜。ぬけ句を臆

や集真外よいさゆうんと或のくきてる切字の
海なる人土其方々系双紙よいさうらんとほよはと
自他切

人の家を買わて残るといふ

け切る全く新製ろく 貞享式よる川句たろく
いうよ甚富とても切字よ新製といふもの有
へきぞけいよえはマくうて年忘と物ぬや
此訂めてるろく 忘れとほく訂そくごらぬ
たの評言よいいるしてきよ一格何の子細も
るきるるるそ天ぢやの地ぢやの新製ぢやれ
といふぬえをトよほくるきいひさよたろく

の物ぬ訂そるる身の例をりて又よあ
玉の年立つたあしよまらるるよめ
辞かこえ又文字をへるもさしよとみかまの社の
おくらりあやとろく松のトあつたくのぬは
中のかへはの字のまのトを至るろくはの字よ
得るを總て首とろく 辞のてでにをははもの
とぞつしとろくを一つよ合せて。泡後よ後とま
せく。續く訂の首とろく。その疑のやよとるる
たれたろくはにいうでいづれいづついづれ
けるるを合せて一つよ何とよとろく
れ又字を辞の本とも首ともいへり。此の辞

を止まきて。下を法よくする。初めは切めて
結ぶ一括なり。其の縁のをくへは、まじい
そぎ、不思攸ましおわへる。けは、けをき
ひらき、けは、けのりそ知らせれる。接切中の
切心の切を切名。口傳秘授なり。いらてめ
学の用なり。

中の切

猫のまやむと。猫のおろ月
猫は止時大言ぬ。國の紙月と立まのなりて。
おとおの七文字の中。心字はともは、中
の切といふなり。

句讀みてあら。人者識の人をすけくは、
是もむつとく言てめ、子のぬま、
うぬ、切めて、けは、けは、けは、
玄妙等の引句は、付く、つむる、
あまきを含め切ると。続く方は用いて。下を、
結ぶとの二、依て、年子へし

心の切

結ぶは、けは、けは、けは、
註れ、けは、けは、けは、
かる、やと、歎息のやを用へ、
りして、平法の傳は、演じらん。そそ、
けは、けは、けは、

かづづのうた田莊の酒屋といふ點ありて。よるこ
よろきまの富平を思ひやり〜さ〜ら〜とぞ。然
たみ文字よ句を切て。桐の本やとつふべられと。さ
いへる桐のみる〜ん。さへ桐も乾もあ〜の。田家
を鉢ま〜ふく〜れぞ。乾も〜ら〜と句を切て。鉢の
内を備つ〜きもあ〜の。下畧 堀の畔と祈言までむすへり
を廻〜

青くても有へきおそ〜ら〜し

米く〜友そ今方の月のあ

らよふ〜とつる余情そ。この字は合て下の結す
ふさ〜る〜と。上へ〜と切つ〜ら〜。何處心な

らふ〜切ら〜。はは祓ぐゆる〜。いつる病句〜

コノヲレハオホキナ 這教棟す〜と。ま〜と。下の時〜。不とあるよ

ア以下。そのめ〜。ぬ〜。言〜。け〜
言ス。青くても有へきおそ。青く〜。あ〜。さき
た〜。と。裏〜。詞を合〜。てよは〜
色のそと〜。てよは〜。さ〜。と。け〜。上〜
近りて切つ〜。と。い〜。と。け〜。は〜
上へ〜。切〜。米く〜。友そめをハ
歎息のそ〜。米く〜。友そといひ。あ〜。いひ
けその一字よ。いろ〜。の〜。故に歎息よ
てききをの字なり。然るを何處んる〜。切

とありと思ふ。後て是をいふ。挨拶切中の
切自他切を切玄妙に回しを回し大まそ
心の切句後切押字未承のし孫の各目大捨へ
し。前より男といふべく。僻るの多く交り
今の世も是の各目用る人るしとおあり
と。此そくも依ては依てのてはあり孫
いひて。是のそくし。そくし用るる
くれ。祖翁廿四も依ては古人あり。い
をかできて今そくし。めとカさし。ま
とくし。

古今抄

貞享式
東花式

東花坊支考著

芭蕉翁十九ヶ条を。貞享式と題せし。減後
人の称るる。序より。享保十四年板
へ。本蓮二房。前の有也を。の。あり。ちめ
上て言ふ。合せ。け。物の要とする。不
王のには。ある。くら。とも。その
平花坊序。曰。依ては。五倫の。を。和ら。け。訓。諫。を。諒
笑の用る。と。と。し。中。男。た。せ。成。序。を。す
や。聖。典。の。掟。も。た。す。日。お。お。ご。そ。る。る。人。を
との。法。も。年。か。あ。る。人。を。お。り。よ。と。い。ひ。中。男。

世はる五倫の和を本として君父の善を進め入
し。ぬすの悪をやらさん。善を善と。悪を悪
とし。直言をひて直諫す。時々の杖。楚の子西
の。夫を一音の大道と。いふ。王の悪を和けし。故事より出。又亦く百世の明監を
待といふ。子へき。依傍の杖。必
へき。依傍の言。奉る。下男

言。二師の金言。て必。味へき所。く
丈艸。猿。跋曰。猿。猿者。芭蕉翁。滑稽。替之。首。諺也。史
記。姚察曰。滑稽。猶。俳諧也。屈原。卜居之。語曰
突梯。滑稽。王逸註。轉。隨俗也。如脂。如膏。柔。弱曲也

以。繫。楹。乎。謂。同。諧。諛。也。さ。る。依。傍。人。と。む。つ
ま。く。け。の。嫌。け。抄。ま。と。訓。諫。を。り。て。道。と。な
し。談。笑。を。も。て。法。と。言。り。人。の。上。を。て。い。く。子
ん。で。ま。さ。さ。さ。如。く。女。あ。り。て。支。る。ま。さ。さ。さ
高。擧。る。る。び。人。を。妬。ま。ぬ。人。を。あ。ざ。ま。ぬ。い。ひ
下。さ。ぬ。礼。を。し。約。を。し。常。を。し。み
を。あ。る。人。則。是。守。傍。勢。と。も。依。傍。と。も。言。へ
然。る。を。世。の。依。傍。の中。に。あ。る。善。と。ま。さ。さ。反。し。ま。さ
して。ま。い。く。自。そ。く。あ。る。て。あ。る。自。そ
自。備。も。て。情。強。く。負。を。み。有。然。して。后。已。く。拙
た。あ。る。て。常。に。人。を。怯。く。言。下。を。病。あ。る。り

漢家の字書にも哉の字と歎と一用。倭
みす只いと訓をへし。歎と歎のなきをいひ字と哉
と倭きをいふ。かと引た同まろく。哀かるるとも。哀る
るごとし。引た字と日本ヤマトの助治りて。漢よる那の
字を用る。之を詠嘆の餘韻といふ。那字と詞を
詠へし。倭ヤマト名よる哉カ那ナの二字ろく。か
漢家の字ちよあて。歎カ字カの倭カ。那ナの字の
と言出。後スては抄のつ。日本ワカの手
尔はの字を。漢文に當て言ふ。何れもよる
まろく。いろよしかる。かといふ。辞よるを
詠へし。わろく。故よかる。といふ。づき。ふ。か。

の言も多し。一カ集め。うるといふ。ふそ
ろしと。又う。わろく。訓を。又やと。の同言別
訓。ろく。と。と。と。漢カあ。那ナの字を
用ひ。倭ヤマト名よる哉カ那ナの二字ろく。といふ。よる
ら。げ。予。考。よ。か。る。や。の。も。ろ。く。ま。ま。ど。支。達。の。あ
せ。む。ろ。く。い。ふ。と。ろ。く。人。も。あ。る。れ。と
一説を儲て言ん。うるといふ。心。す。け。抄。も。称
歎。ろ。く。といふ。め。く。治。定。歎タ息シ。ろ。く。不。そ。か
と。言。り。歎タ息シ。といふ。と。前。も。い。ふ。月。も。花
も。お。の。至。極。ろ。く。不。そ。歎タ息シ。といふ。歎タ息シの
ま。の。も。あ。る。鳴ナ呼フよ。き。咄ツ嗟サか。る。き

於痛き咨たりき。好いふくめく嗚呼といふ。惟
歎息也。新撰字鏡。阿者嘆声也。阿ハ五十頁の
始。言靈といふ所。ふりねえ思各寸。揚が月又
まじ思ひじといふも。まの揚ぢやるあ。よい月
ぢやるあと。いふんそかるといひくあ
へし。かるの反りりの反ありと。あの一
る。あを重ねてあくと歎息る。やの字と
ま。反あり。あを言る。俗語。やんやといふ。則
歎声る。故にかるやの三字同言別訓る
とま

古式の名目。願のりふといふもあはと。漢文も

変てき字なり
東花も世にもせよ。いふもいふもいふも
ぞとてあまういふもいふもいふも
三品のやのさ
古抄よりやの子のさ。七品のさの名目あは
和漢。通用と。只三品のさ。人。オ一疑の
那といふ。和漢。やの子の正義る。一用
りして餘行る。オ二は称歎の哉。漢文の字ま
も多用りて。何いふ一。二。三。もいふ。オ三
口合の也。漢文のをりて。爲道也。回也。白也。韻會
の言る。同る。然る也。の字。さ。う。の。よ。て。切。字

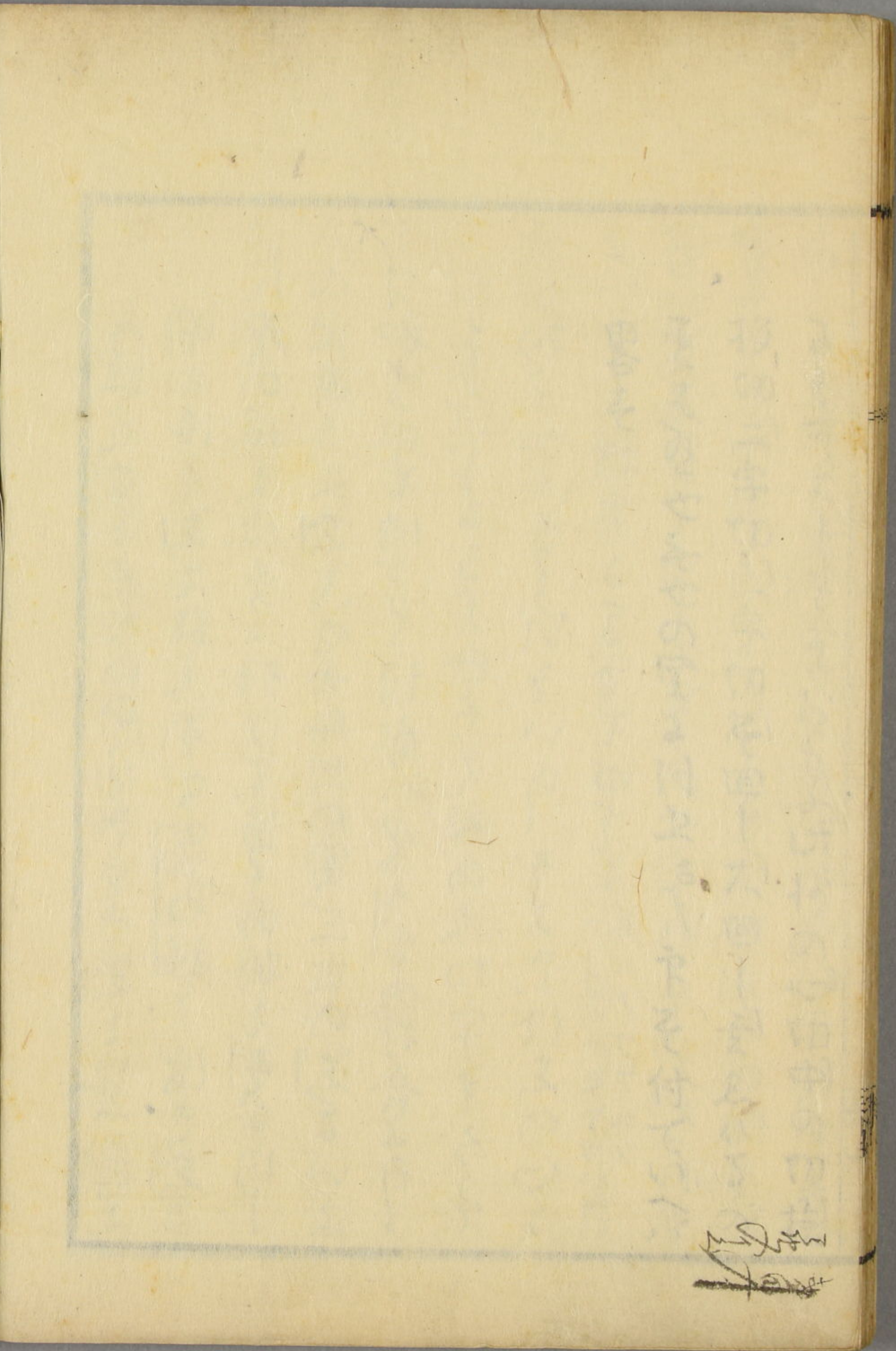
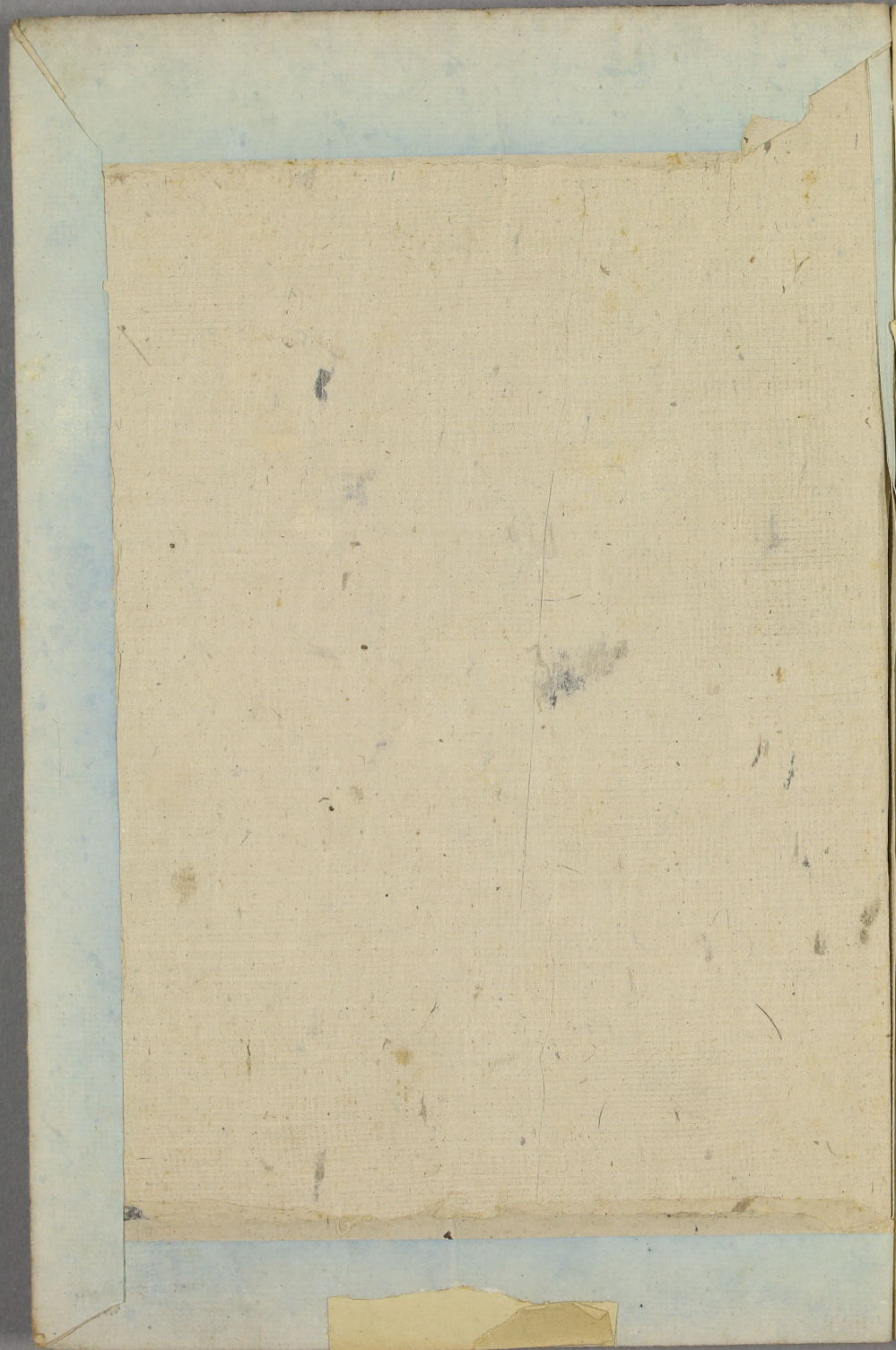
よるしめはとあり。まゝや杖ゑやの敷くや狝日よ
りて哉とあり。一。又所の也。よるしめを備うくま
式の常法也

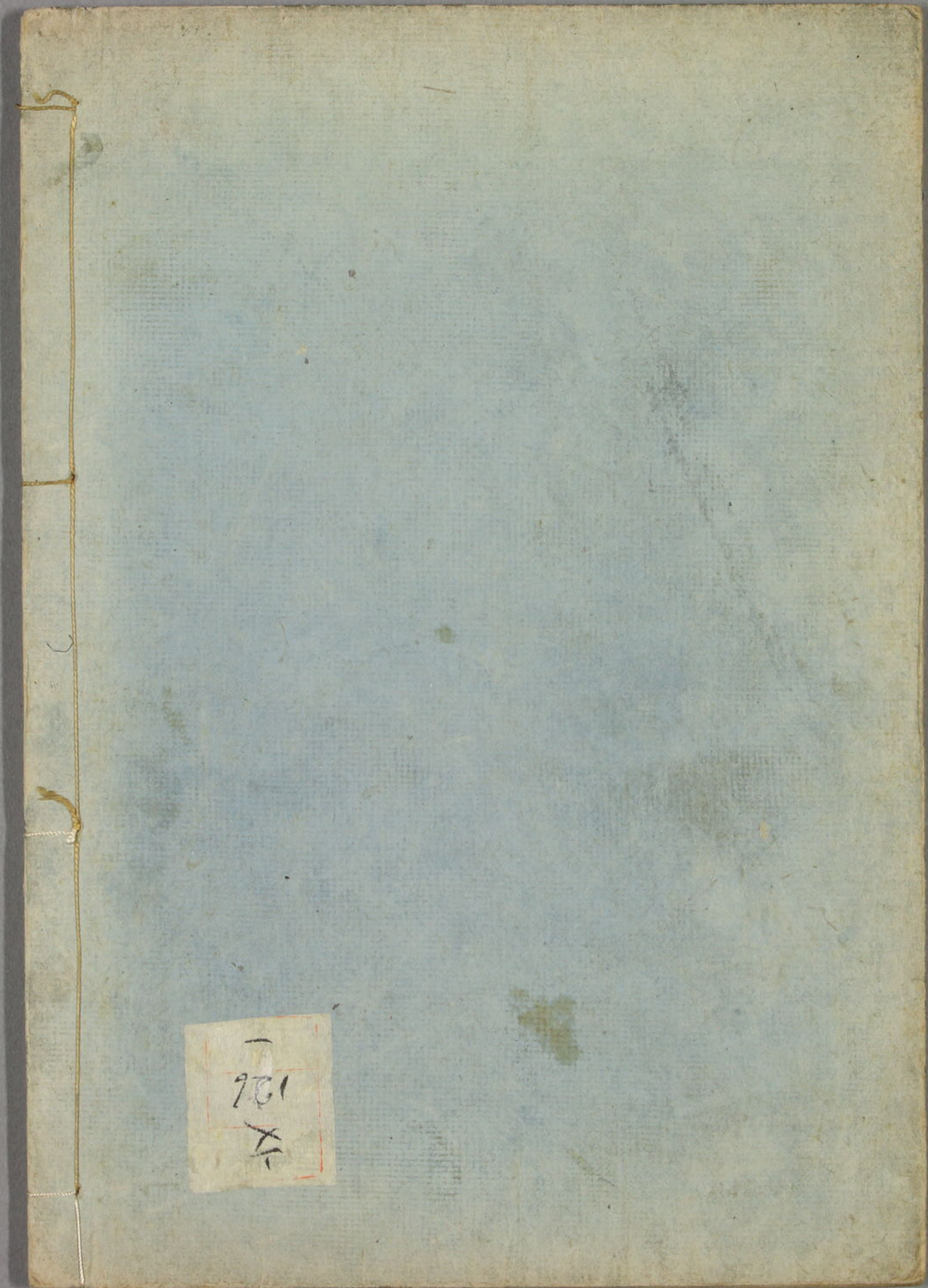
類のやそやの正義といへる。大なる僻^ヒも
僕文^ナ中^ナてよるしめをいふ。いふ言ひは、
杖^ヒゑやのやのよ。ふのよ。いひて。おらよと
感^ヒあ。杖^ヒのよ。おらよ。杖^ヒのよ。杖^ヒのよ。
三。舌^ヒ孫^ヒ冠^ヒのやとりおらよ。いふ。合^ヒせよ。一。
三ツのよのよ

助後の中よ。三世のよ。いふ。いふ。いふ。いふ。
おとよ。杖^ヒ未^ヒゑや切^ヒ字^ヒよ。いふ。いふ。いふ。いふ。切^ヒ字^ヒよ。

らんや。まゝ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
まゝ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
よ。二。字。の。杖^ヒ。を。あ。う。い。い。口^ヒ。杖^ヒ。未^ヒ。ゑ。と。い。言。り。
未^ヒ。耳^ヒ。の。食^ヒ。ス。ト。飲^ヒ。ま。ぐ。と。い。ふ。よ。不^ヒ。噲^ヒ。不^ヒ。飲^ヒ。と。い。ふ。
て。平^ヒ。よ。う。文^ヒ。句^ヒ。の。用^ヒ。よ。い。ふ。助^ヒ。後^ヒ。よ。あ。い。ふ。い。ふ。い。ふ。切^ヒ。字^ヒ。
よ。用^ヒ。い。き。及^ヒ。ば。ら。う。

いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。いふ。
杖^ヒ。未^ヒ。の。式^ヒ。目^ヒ。よ。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。と。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。と。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。と。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。と。い。ふ。
杖^ヒ。未^ヒ。の。切^ヒ。字^ヒ。よ。あ。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。と。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。と。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。と。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。と。い。ふ。
いふ。杖^ヒ。未^ヒ。の。切^ヒ。字^ヒ。の。目^ヒ。を。減^ヒ。し。よ。い。ふ。杖^ヒ。未^ヒ。の。切^ヒ。字^ヒ。の。目^ヒ。を。減^ヒ。し。よ。





文
191